
神世界 蒼穹への翼

nanaki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神世界 蒼穹への翼

【Nコード】

N8052U

【作者名】

nanaki

【あらすじ】

かつて狂った神に蹂躪された世界。

魔物の巣窟となりはてた空を求める少年は、自らの過去と相対する。

プロローグ

この世界には『魔法』と呼ばれる力が存在する。

何時から存在するのか？ 問われて正確に答えられる者はいない。文明が生まれ、歴史が刻まれた頃には『魔法』は当たり前のように存在していた。

遙かな神話の時代。神々が肉の体を持ち人間と共存していた『黄金時代』に神から授かったと言う者もいる。しかし、神話はおとぎ話であって史実ではない。

故に確認の術はない。

宇宙誕生の際に、他の物理法則と共に生まれたのだと言う者もいる。

それこそ調べようがない。

しかし、多くの者はそんな事は気にもとめない。

『魔法』はこの世界に存在し、文明と共に発展してきたのだ。

そして、この世界『魔法』を理解し、その力を自在に行使用する者達が身近に存在しているのだから。

始まりが何処かなど些細な事でしかない。必要なのはその原理と、利用方法なのだから。

例え、その力を制御しきれずに滅亡していった多くの文明が存在しようとも、彼らと同じ過ちを犯さなければよいのだから。

だからこそ人は、歴史を紡ぎ、過去から学ぶのだから。

しかし、過ちは繰り返される。まるで一つのサイクルのように。光と闇、生と死が表裏一体なら、繁栄と滅亡もまたしかり。決して切り離す事はできない。人が過ちを繰り返す存在ならば、人が築き上げた世界もまた過ちなのだろうか？

だが、その問いには関係なく世界は繁栄と滅亡の輪舞曲を踊る。そう、何度でも。

第二次世界大戦後期に起死回生を計った小国が開発した最終兵器

の暴発によって、世界に穴が穿かれた。

この世界とは別の世界、存在しない世界と繋がったその穴は、後に『特異点』と呼ばれる。

国が消滅し、巨大な大穴が開いた大地の遥か上空に、直径一キロの黒点が生まれた。

この世界とは別の、存在しないはずの座標に繋がった黒点から、『それ』は現れた。

彼方より現れし存在。人の魂を喰らいし存在。

人々に『狂神』（きょうしん）と名づけた超存在。

そして、神と人の存在を賭けた戦いが始まった。

狂神は人を、世界を支配しようとした。無論、人々は彼等に対抗したが、高位の精神体であった神々に 物理的な攻撃は効果が薄く、人類の英知の結晶だった魔法ですら、彼等にとっては掠り傷程度のダメージしか与えることはできなかった。

だが、脅威は狂神だけではなかった。この世界に昔から存在していた魔物が活性化、凶暴化し人間に牙を向いたのだ。

人間は蹂躪され、踏みにじられた。人々は絶望し、滅びへと向かっていった。

誰もが諦めきった時、世界に『英雄』が現れた。狂神を滅ぼす聖剣を携えた、六人の異形の騎士を従えた英雄は、大軍を率い次々に狂神を滅ぼしていった。

歴史に聖天大戦と刻まれるこの戦いは、多くの犠牲を払いながらも、辛うじて人間側の勝利で終わった。

世界中に消えない戦争の傷跡を残しつつも世界は徐々に復興していき、半世紀を得て戦前を遥かに上回る文明を築いていった。

平和な時代は、人々に新たな繁栄を与えた。狂神は消滅したが大戦時に活性化した魔物が徘徊し、人々を脅かしたが急速に発展した魔法技術と科学技術は、人々を護る剣となり楯となった。

だが、平和は決して長く続く事はなかった。

偏狭での小さな小競り合いから始まった、軍事国家ガリルによる

武力侵攻。

いかに強力な軍事国家とはいえ小国のガリル。誰もが数で遙かに勝る聖天軍の勝利を信じて疑わなかった。しかし、禁じられた古代文明の超技術を用いた兵器を駆使するガリルは、聖天軍神殺部隊SDFと一年もの間、互角以上に渡り合った。

開戦当時は世界中が注目したが、辺境の小国での戦いなど人々の関心は薄れていく。

どんな凄惨な戦争も、自分の身に降りかからなければ他人事ではないのだから。

ガリル首都『エイス』

これまで徹底抗戦を貫き、決して引こうとしなかったガリル兵達の突然の撤退。

彼らが首都に立て籠もってから32時間後、連合軍は状況把握のため斥候を潜入させる。

（人の気配がまったくしない。どういう事だ？）

兵士の一人が眉を顰める。街には人の気配がまるでなかった。念のために広範囲に渡って魔法走査を行ったが、生体反応はなく兵達を困惑させた。

風もなく、空気さえも息を潜めたような静寂の中に立ち尽くす兵士達。

ここで途方に暮れていてもしかたがない。待ち伏せを警戒しながら、兵達は慎重に進んでいく。厚底のブーツが砂を噛む『ガリッ』という音が微かに響く。

乱立するビルとビルの間、薄暗い裏通りを滑るように駆け抜ける彼等の鼻梁を、馴染み深い匂いがくすぐる。生臭く、さび臭く粘った臭い。

血の臭い。

それは先に進めば進むほど濃度を濃くしていった。兵士の意識の片隅でまったがかる。これ以上進んではならない、引き返せと。

それでも足は止まらない。止められないのだ。

まるで、何かに引きずられているように。

血臭はもはや、大気のように厚みを持ち、兵士達を包む。

足元で鳴る『ガリッ』という音が『ビシャッ』という音に変わる。悪寒と戦慄が混ざり合い、冷たい汗と一緒に背中を流れる。戻りたい、行きたくないという意識と別に、動き続ける脚。

視界が急に開ける。首都中央に位置する広場に出たのだ。

「——な、なんだこれは——！」

広場は朱に染まっていた。老若男女を問わず高く山のように積み重なった死体。人を集めてまとめて爆破し、巨大な筈でかき集めればこんな感じだろうか。

それほどまでに死体はばらばらに碎けていた。死体から流れる血が川となつて通りを流れ、街路樹は血に染まり、葉はまるで紅葉したイチヨウのように紅く濡れたように光っていた。噴水は血を湛え、真紅の飛沫を吹き上げている。そこは千切れた手足と一緒に幼児の頭が浮かんでいた。

「——じ、地獄だ——……！」

誰かが呻く。誰かはその場で胃の中身をぶちまけている。誰かはこの世界を創造したという古き神々に狂ったように祈りを捧げている。へたり込んだ誰かは、尻を濡らす血の感触に慌てて立ち上がる。うとするが、地面を濡らす血に足を滑らせ大きく転倒する。

全身を血で濡らした兵士は、恐慌状態に陥り泣き叫ぶ。

「な、なんだ、歌が、歌が聞こえる！ 歌っている！」

全てが真紅に染まった世界に小さな歌声が聞こえる。その発生源が噴水に浮かぶ死者の、虚ろに開かれた口から発していると分かったとき、その歌声が周囲の碎けた死者から発せられていると理解したとき、彼等の精神は完全に崩壊した。

死者の歌声が響く中、見上げた空もまた真紅に染まっていた。そして兵士が最後に見たのは、空全体に広がる巨大な黄金の魔方陣。虚ろに空を見上げる兵士達の周りの粉々に碎けた死体が、さらに

細かく砕け、金色の光の粒子となって真紅の空に昇っていく。やがて全ての死体が河のように流れる血液さえも光に分解され天に昇り巨大な渦を描きながら、魔法陣の中央に輝く白銀の塊に吸い込まれていく。兵士達は空ろな瞳でその光景を眺めていた。

斥候からの連絡が途切れてから三時間後に突入した連合軍兵士が見たものは、放心状態で座り込んだ兵士達と、全ての惨劇が嘘だったように寂れた町並みだけが取り残されていた。

これが、軍事国家ガリルの最後だった。

同時刻

戦場で二人の戦士が向かい合っていた。重厚な金属の外骨格に頭からつま先まで覆われているが、動きは生物のように滑らかで淀みがなく、装甲の重さをまるで感じさせない。

彼等が身に纏っているのは、聖天大戦時に開発された人間が神と戦う為の最終兵器、ディフェンダー「ディフェンダー」。

『守護者』、通称『DF』と呼ばれる兵器は聖天大戦時に開発され大戦後、世界中で独自に発展していった。

魔法士の肉体を精神体に変換し魔力を極限まで増幅する『サイドライブ』

変換された精神を宿し、増幅された魔力の受け皿となる人型魔動機。DFは人と同等のサイズだが、発揮する力は桁違いだった。

人を肉体という制約から解放し、潜在能力の全てを行使させることのできる第二の体。

それがディフェンダー「DF」である。

そして、精神崩壊の危険を乗り越えDFを精神に宿す事ができた者を『魂と繋がりし者』リンカーと呼ぶ。人を超えた力を振るう彼等を、人々は畏敬と羨望、そして恐怖を込めて見つめる。

純白の装甲を持つDFと、真紅の装甲のDF。

睨みあう二体の周囲には多くの死体が散らばっている
死体が纏っているのはガリルの軍服。

たった一機のDFにより、ガリル軍は壊滅的な打撃を受けていた。二体のDFは剣を構え向かい合う。その姿はまるで決闘を始める騎士のようだった。

一瞬後、二体はぶつかり合う。

衝撃波が周囲の死体を吹き飛ばし、激しい土ほこりが舞い上がる。激しく剣を交わす二体の姿は肉眼で捉える事はできない。DFと化した人間は、人を遥かに超越した力を与えられる。超高速機動など造作もない。

大気を震わす剣戟に混じり、魔法が乱れ舞う。

紅蓮の炎、凍てつく氷風、竜巻、雷撃あらゆる攻撃魔法が互いを滅ぼさんと襲い掛かる。

繰り出される破壊の力を掻い潜り、二体は肉薄し、剣を交し合う。剣風が衝撃波となり二体のDFの装甲を裂き、大地をも砕く。細かな装甲の破片が煌きを放ちながら散る。DFは血を流さないが、代わりに傷口から魔力が流れる。

放たれる必殺の一撃は、相手の必殺の一撃に弾かれる。

純白のDFの刃が真紅のDFの右目を裂くが、真紅のDFは怯むことなく距離を詰め、剣を振るう。

ぶつかり合う二体の姿は、互いの喉笛を食い破らんとする獣を思わせた。

エネルギーを収束された光剣がぶつかり合う度に、美しい鮮花が舞い散る。

真紅のDFは天高く舞い上がり急降下し、純白のDFは相手を追うように真つ直ぐ上昇し相手を迎え撃つ。

一瞬、二体は交差し、すれ違う。

地上に突き刺さるように着地した真紅のDFは、地面に片膝を付く。その右腕は肩口から切り落とされていた。主人に遅れて、断ち切られた右腕が回転しながらDFの背後に落下する。周囲に、純白のDFの姿はなかった。

手ごたえは確かにあった。確かに致命傷を与えたはずである。光

の刃は確かに相手DFのコアに届いた。最強と言われるDFの弱点は、サイドライブによって変換された精神体が宿るコアである。操者の精神体を詰め込まれたDFのコアは、人間で言うなら脳であり心臓である。

真紅のDFは地面に倒れ込む。操者の意識が途切れた事で、DFが解除され人の姿に戻っていく。強大な力のぶつかり合いによって生じた衝撃波が土砂を舞い上げ、動かぬ戦士に降り注ぎ、その体を少しずつ大地に飲み込んでいく。

開戦から一年。ガリル軍、將軍ヴァイスの戦死により戦争は終結した。

首都で起こった惨劇は完全に伏せられ、世界にはそう報じられた。たった一人で將軍ヴァイス率いる親衛隊を壊滅させ、一騎打ちにより、ガリル最強のDF操者であるヴァイスを倒した戦士は、決してその名を語られる事はなかった。

そして二年の時が流れる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8052u/>

神世界 蒼穹への翼

2011年7月12日03時15分発行